慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	白井先生のこと
Sub Title	
Author	山口, 昌子(Yamaguchi, Masako)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.44, (1982. 12) ,p.378- 380
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	白井浩司教授記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00440001-0378

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

が、先生ご自身はよく承知していてもこうした劇しい言説は吐かないし、桁外れの力を他人に見せない。

わたしのごとき劣等生にも優しい先生は、卒業式の日に、「人生の日曜日／サン・グラングラン／その他の詩／レーモン・クノオと／クノオを愛する岡田隆彦に」と書いて下さった。一週間ごとに日曜日をむだにすごすのはたやすいが、人生の日曜日をすごすのは楽しいだけに難しい。どうやらわたしの場合は、白井先生やクノオのようにしゃれた人生を生きるのに、いつまでもウィーク・デイをすごさねばならないらしい。いや、日曜日を待っていること自体、すでにして野暮な人生だということかもしれぬ。

こういう先生が、他人に尽しすぎてお疲れになった最近の某日、岡田、待っていろ、とおっしゃった。たまたまわたしと生年月日も同じ乙女座同士で仏文学科の同窓である美しい女性のいる銀座のしゃれた店、人呼んで「石像の宴」とかいう（とにかくいつも酔っていて正確に名前をおぼえることができないのである）にあとで行くとおっしゃった。なのに、きちんと裏方たちに礼をいうと、わたしの前を通りすぎ、おひとりで帰られた。実を申せば、その晩、優しすぎるがゆえに女人に気を配給しすぎた人物の名をも持っているらしい如上の店で、わたしは、そのときこそ楽しく、お疲れを医やしたいと思っていたのだが。共同通信社のネオンサインがいくらか明るく見えた晩のことでる。

（詩人・美術評論家・昭和三十八年仏文科卒）

白井先生のこと

山口昌子

六月末、留学先のパリ・国立新聞研究所の学期末試験が終ったとき、ホッとした私が一番先に出かけたところは北仏の港町、ルアーブルだった。学生寮の仲間は、私が「ルアーブルに行く」というと、皆、怪訝そうな顔をした。ノルマンディーに行きたいという日本女性のMさんを同じ方角だからと半分、騙していっしょに出かけた

のだが、彼女も到着するや、「もう帰りましょうよ」と言い出す仕末だった。

ルアーブルは何もない港町である。サルトルが教師として最初に赴任し、『嘔吐』を執筆した地である以外は。夕方、私は退屈しているMさんを引張って、防波堤の方に行った。日曜日の夕、ロカンタンが見つめた海と空と灯台を確認するために。鷗が沈みかけの暖かい太陽を浴びて翔んでいた。私はロカンタンのように「人間を愛さないでいられるだろうか」と一瞬の間、思った。

翌日、私たちはキャフェのテラスに坐っていた。一九七〇年当時のルアーブルは、いかにも『嘔吐』の誕生の地にふさわしく、孤独と空虚さに満ちていた。日本人はまだ珍らしい存在らしく、たまに通る船員が、チラチラッと私たちの方を見る。そんな中で、私は空いろの服を着た小柄な婦人と、クリームいろのレインコートを着て、黄いろの靴をはき、みどりいろの帽子を冠った黒人が、道の曲り角で突き当たる〝冒険〟の瞬間を待っていた。

はなはだミーハー的な私のこの行動に、白井先生は苦笑なさるかもしれないが、このルーアン行きは、当時、進路に迷っていた私の〝仏文出身〟の証しであり、同時に私自身のアイデンティティ（フランス語ならイダンティテ）の証しでもあった。

仏文科生待の必須課目「仏文学史Ⅱ」は、私にとって大学生活を通じて最も退屈しない授業だった。特に『嘔吐』についての講義は、白井先生のあの独特の美しい声とあいまって、強く印象ずけられた。中でも〝冒険〟の定義は一大ショックだった。もともと文学少女で、中、高校時代にサルトル、カミュを読みふけった末の仏文科行きだったが、それまで私は自分がサルトルを本当は読んでいなかったこと、〝冒険〟とは何かを本当は知らなかったことに気付いた。

さて、ルアーブルで数日過ごしたのち、私はその夏の一か月間をモンペリエ大学の夏期講習に出席して過ごした。今度はフランス人に見習って憧れの南仏（ミディ）で夏期講習にことよせ、バカンスを過ごそうというわけ

だ。しかも近くの古都アビニオンでは演劇フェスティバルを開催中である。それも、なんと、サルトルの『悪魔と神』をフランソワ・ペリエの主演で上演していた。この作品も実は白井先生が教本に使われ、私たちは四苦八苦して和訳をさせられたものである（先生の名訳がまだ出版される前だったので、従ってアンチョコもなかった。確か、新学期から始めて、夏休みに入る直前に、やっと主人公ゲッツが登場したので、私は当時、こんなに主人公が長期不在で、観客は退屈しないのかしらと余計な心配をした記憶がある。ところが、夜九時、南仏名物のミストラルの吹く中、野外劇場の幕が開くや、退屈する暇もあればこそフランソワ・ペリエ紛するゲッツが、マントを翻がして登場したのである。つまり私たちが三か月近くもかかって読みすすんだ部分を、名優たちはたちまち演じてしまったというわけだ。

これは勿論、白井先生に罪はない。先生の指導も空しく私たちにサルトルを読みこなす能力が、特に語学的能力がなかったからにすぎない。

それが今、曲りなりにもフランス語との縁も切らず、私は自分なりの完璧な瞬間、〝冒険〟を求めながら生きている。私にとって、大学時代は、決して人生の〝休息所〟だけではなかったわけだ。白井先生、どうもありがとうございました。

（夕刊フジ勤務・翻訳家・昭和三十八年仏文科卒）

白井先生とわたし

志村節子

1

一年間の日吉での教養学部時代が終ったとき、私は仏文にしようか美学にいこうか、決めかねていた。三田の専門学部選択のガイダンスを受けると、当時、仏文を率いておられた佐藤朔先生と白井浩司先生の説明があった。仏文にはフランス文学を勉強する人ばかりくる必要はない、演劇でも音楽でもなんでも構わない、自分のなかから自然と湧きでるものを育てていこうとする人がき